

〈書評論文〉

エロティシズムと親密性の再構成

—— われわれが勝ち取ってきた世界 ——

Jeffrey Weeks,
The World We Have Won:
The Remaking of Erotic and Intimate Life
 (Routledge, 2007)

山下 泰幸

1 はじめに

家族の統合の弱まり、結婚の衰退、あらゆるものごとのセクシュアル化、性的逸脱の常態化、などと盛んに描写される今日の性愛と親密性を取り巻くカオス的状况は、道德の不在による不確定性の高まりの顕現であるとされ、これまで左右を超えて多くの学者に悲観的に受け止められてきた。そのような悲観主義者の中には、M. フィリップスに代表される道德的保守主義者、社会関係資本について論じる R. パットナムに代表されるコミュニタリアン、さらには社会の液状化について論じる Z. バウマンらが含まれる。しかし著者の J. ウィークスはそうした悲観主義に明確に対抗し、日常生活を変革するこのエロティシズムと親密性の変容を、リアリズムに基づきながら肯定的に評価する。なぜならこれらの変容はひとりひとりの行動の積み重ねによって方向づけられており、われわれ自身によるわれわれ自身のための、日常生活における民主化の長いプロセスの一部と言えるからである。その意味でこの世界は、「われわれが勝ち取ってきた世界 (the world we have won)」である。われわれは性の多様性と新しい親密性に対して開かれた社会を目指す、終わることのない革命の真ただ中を生きている。

本書の主要な目的は、親密な関係性や性愛にかかわる生活をわれわれがどのように送っ

てきたかという、その生き方の変化についての「まとめ表 (balance sheet)」を提示することであると著者は語っている。本書の内容は1945年から2005年までのイギリスにおける性愛と親密性の変容についての研究であるが、単に歴史の流れを年表的に並べるのではなく、再帰性、グローバリゼーション、消費主義、個人主義、家族、新しい関係性といった概念を用いて、多面的にその変容の本質と展開を分析する。分析の開始点である1945年とは、第二次世界大戦の終結によりさまざまな社会福祉制度の出現のきっかけとなった年であり、現代社会の主要な設計者であるベビーブーム世代の誕生の年であり、そして著者のウィークス自身が生まれた年である。また2005年とは、イギリスにおいて同性愛者カップルの権利擁護のためのシビル・パートナーシップ制度が設立された年である。したがって本書は、イギリスにおいてセクシュアリティ研究の最前線に立ち続けてきたウィークス自身による、彼の生きてきた時代の総括でもある。

2 本書の構成

2-1 異なる時代と歴史的連続性

第一章では、1945年から現代までの間のセクシュアリティと親密性の変容を概観することで、社会の歴史的連続性についての分析がなされる。しかし分析を開始する前に、これまで多くの学者が陥ってきた三つの罠に嵌らないように注意をする必要があることを著者は強調する。第一の罠は、この変容を自律的もしくは不可避免的なものであったと錯覚してしまうことである。セクシュアリティとは歴史的に形作られたり再構成されたりし得るような一連の可能性、行為、規範、欲望、リスクなどの総体のことであり、一人ひとりの行動の結果と密接に結びついた概念であるため、そのような歴史観は否定されるべきである。第二の罠は、あらゆる変容を道徳的墮落や生活の乱れとして錯覚してしまうことである。現状を分析するために存在したことのない過去を再創造し、理想化してしまう傾向には、常に注意を払うべきである。第三の罠は、変容は表面的なものであり、構造は根本的には一切変化していないと信じ込んでしまうことである。この主張はとりわけフェミニストの間でしばしばみられる傾向にあり、確かに資本主義の拡大による性の商品化・自由化などについて考える際には極めて重要な観点である。しかしながら現状を客観的に捉えなおす際には、このような考え方に固執することはしばしば悪影響をもたらしてきた。

社会が歴史を通して連続的なものであるということはすなわち、変容は再帰的に起こることであり、セクシュアリティと親密性の変容の大部分は、これまでの時代における積極的な努力の積み重ねによってもたらされている。著者が強調する歴史的現在という

概念は、そこにおいて成立していると言える。性に関する言説の増大、人びとによる性の多様性の認識、リプロダクティブ・ライツの領域の拡大といった現象が象徴しているのは、長らく続いてきた男性による女性支配の不可逆的衰退としての「ジェンダー革命」であると著者は述べる。不確定性の高まる世界においては、男女間の不平等や抑圧さえもそれが存続するためにはイデオロギー的に正当化される必要に迫られるため、それらは結果としてその道徳的裏付けを喪失し始めている。また、現代社会は、人びとが直接的に経験するセクシュアリティと親密性に関わる問題を、権利と責任の問題、すなわち社会的正義の概念へと接続することで、ローカルとグローバル、ミクロとマクロを結びつける社会でもある。

2-2 抑圧の文化

第二章では、1940年代および1950年代の「(性的)抑圧の文化」に焦点があてられる。この章ではまず、ウィークスが育ったサウスウェールズにあるロンダ・ヴァレーという田舎の町の当時の状況が描写される。この町に広がっていた第二次産業を支えるコミュニティの力強い連帯感、批判を許さない硬直性と閉鎖性を同時に持ちあわせていた。悲惨な戦争が終わり、人びとは社会変革への希望を抱いて奮闘するものの、実際に日々の生活を変化させるには至らず、性的抑圧の文化によって親密な関係性は覆い尽くされていた。確かに戦間期的な極端な禁欲思想に基づいた性的抑圧が退けられたことで、正式な婚姻関係という非常に限定された範囲ではあるものの、愛の悦びを強調する傾向が女性のセクシュアル化を促したようにも思える。しかしこの時代の親密性や性愛の変化がもたらした結果は、狭い家族的価値観およびヘテロセクシュアル的価値観の強化であり、決してリベラル化ではなかったと著者は述べる。現代の悲観主義者の一部はしばしばこの時代の人びとの間の強い連帯感を理想像として提示するが、実際にはそのような力強い紐帯は男性間のみに存在しており、女性は家庭内に閉じ込められていた。また、同性愛はパターンリスティックな社会的干渉の標的となり、イギリスで19世紀から続いていた古い「クィア（オカマ）的世界」は下品で汚らしいものとして消滅し、「尊敬されるべき同性愛」という新たな概念が出現し始めた。イギリスという国全体を見ても、少しずつではあるが人びとの生活に影響を与えるような社会変革の兆しが見え始めてきた。

2-3 大規模な変容

第三章および四章は、1960年代から1990年代にかけての大規模かつ持続的な変化について描かれている。著者によれば、1960年代の「性の解放（sexual revolution）」は以下の点についてとりわけ注目される必要がある。それは、経口ピルを中心とした改良された

避妊技術を通してセクシュアリティと生命の再生産がほぼ完全に分断されたという点と、それによって女性が自身のセクシュアリティを主体的に表現し始めたという点である。

しかし1960年代のこのような変化は、この二つの章で描かれる複雑かつ大規模な変化のわずか一側面にすぎない。そこで、この30年の間の性愛と親密性の変容を、ここでは四つの鍵となる大きな変化で整理してみよう。第一の鍵は、あらゆるものごとの民主化と人間関係のインフォーマル化であり、それはこれまでの時代には疑われることなく結びついてきた諸概念の組み合わせ、例えば性と再生産、性的関係と結婚、結婚と子育てといったような二つの概念間の関係性の断絶を伴うものである。第二の鍵は、とりわけ女性の一部、そしてゲイやレズビアン達において発生した、性的な行動に対する意識の高まりである。ウーマン・リブやゲイ・リブは、その最も劇的な表明であったと言える。第三の鍵は、以上のような社会変動の結果として発生した公的領域と私的領域の境界の大規模な再編である。この再編およびその是非についての議論は、極めて多様な場面で行われた。例えばこれまで認知されていなかった人びとや行動をいかに許容するかという法整備、暴力やポルノグラフィーに対するフェミニストによる糾弾と干渉、子ども期についての関心の高まり、サッチャー政権時代の道徳的保守主義政策などがその戦場となった。第四の鍵は、1980年代初頭のエイズ危機によって激化した、リスク感覚の高まりである。これは、自由という概念が適用される領域の拡大に対して鋭い批判を投げかけるものであった。

経済の再建と新しい消費主義が誕生する一方でそれに対するバックラッシュも存在しているように見えるこの時代においては、社会の種々の変化が非常に複雑に重なり合っており、上記の4つの鍵となる変化を中心として性的価値観の不確定性は増大する一方である。しかしながら、リベラル化、世俗化、性的活動の活発化という三つの大きな物語が、この30年の期間を通して常に根底に流れていたことは確かであると著者は強調している。

2-4 現代のセクシュアリティとその矛盾

第五章と第六章の内容は現代へと向かう。性的多様性という概念に対するひとびとの意識の高まりは、具体的かつ劇的な社会変化の影響によるもののみならず、われわれのセクシュアリティ、そして性に関する意味づけやアイデンティティや法制度が文化的に構築されているという事実が人びとの間で認識され始めたことによる結果でもある。セクシュアリティという概念それ自体に対しては「正しい」や「間違っている」という価値判断をすることは不可能であり、ひとびとのセクシュアリティについて考えるということは、それを形成する社会的な力学の複雑性について分析するということでもある。この二つの章では、セクシュアリティについて研究する上でのそのような前提を確認した上で、現代人の

セクシュアリティについての考察がなされる。第五章では、ライフスタイルの多様性、人種とエスニシティと信仰の多様性、ライフコースの多様性、という多様性の三つの種類について探究する。このような多様性についての分析は、新しい個人主義に対する批判についての客観的な分析を促し、新自由主義の危険性についての議論へとつながっていく。第六章では、不確定性の増大という現代社会の性質を反映した、セクシュアリティにおけるさまざまな矛盾について論じられている。例えば、選択的な関係、男性性と女性性という概念の意味づけの変化、トランスジェンダー運動の出現によって表象されるジェンダー秩序への挑戦、持続的な異性愛規範化 (heteronormativity)、世代間の緊張や対立、テクノロジーカルフィックス、といったようなさまざまな性に関する価値観が同時的に存在し、そしてさらにこれらすべてに対してそれぞれ批判的な立場までもが存在しているのが現代であると著者は述べる。伝統的な価値システムの衰退を伴いながら社会における権威は多元化し、そして性に関する言説は増大してきた。そのことは、多様性それ自体を肯定的に受け止め、理想として追求することを促してくれるが、他方でそのような傾向は、ホモフォビアやレイシズムや個人の信仰や嗜好に由来する抵抗にあっているだけでなく、ジェンダー・コンフリクトが孕む問題の複雑性を主張する者によってもまた攻撃されている。

2-5 親密性の現代

第七章では、結婚、家族生活、友情における経験的な変化や、それらを支える規範・価値観・コミットメントについての最近の議論を扱う。著者によれば、個人の主体性の強調や道徳的選択の個人化は現代社会の大きな特徴であるが、それらは日常生活における相互的なケアについての価値観に根本的に結びついている。そのため、現代社会の変容の原因としての社会関係資本の不足を指摘するという現代の社会学の流行の理論に基づいた悲観主義に対して、彼らがこれまで見落としがちであった新しい関係性のあり方の出現を指摘することによって著者は批判を試みている。とりわけ LGBT の若者たちはそのモデルケースとして存在しており、彼らを含め、そのような新しい紐帯・コミュニティの中には価値観と行動の両面で強い持続性を有しているものもあり、さまざまな人生経験を保証する社会関係資本の新たな源泉となっている。多様な家族形態を支持し、異性愛規範化に挑戦し続ける LGBT の若者たちの生き方を支える規範のことを、著者は「フレンドシップ倫理 (friendship ethics)」と呼び高く評価している。異性愛規範化や新自由主義に同化・適応するのではない新しい関係性の模索は、多様な性別・人数・関係性による結びつき (union) が伝統的慣習をクィア化することを推し進め、権利や承認や参加についての議論に新たな光を投げかけ得ると著者は述べる。

2-6 グローバリゼーションと性的正義

最後に第八章では、西洋社会における以上の変化をグローバルな文脈の中で捉えなおすことを試みている。本書で描かれてきた変容は、個人および集団による行動の結果の蓄積であるだけでなく（それは変容に不可欠であり、かつその中核ではあるが）、われわれが選択可能な行動の幅を広げてきた、社会を再構築する別の大きな現象の影響によるものでもある。その中でも際立って重要なものがグローバリゼーションによる影響である。著者によれば、グローバル化された世界とは西洋のセクシュアリティ概念が徐々に他の地域の性の文化に対して相互作用・浸透する世界であり、そして世界規模で現れる新たな概念が文化を超えて繋がる世界である。今日のグローバリゼーションは、とりわけリスクの本質とその経験のされ方を具体的に変革しつつあり、1980年代のエイズの世界的大流行は明らかにその証拠である。また、リスクは形を変え、新たなコンフリクトも呼んでいる。例えば、発展途上国における女性のリプロダクティブ・ライツや、女性の権利を著しく制限し暴力的に支配する社会におけるコミュニティおよび家庭からの女性の脱出の権利などについての国際的な議論がその例である。これらはグローバル・スケールにおける政治的文化的差異の中核となり得る重大な問題であり、とりわけ西洋とイスラム諸国の価値観の差異の間に存在しているとされるコンフリクトである。国境を越えた議論や運動への参加は、グローバル・スケールで捉えなおされる人権に関する新しい言説の出現を引き起こすものであり、そこにおいて生み出される新たな倫理感覚を筆者は「グローバル・セクシュアル・ジャスティス (global sexual justice)」と呼んでいる。われわれが創造しつつあるグローバル化された世界において、ラディカルなヒューマニズムの存在が確実に必要不可欠な概念として求められつつあるのは確かである。

3 まとめと考察

本節では本書への全般的な評価を述べた後、著者の過去の著作や他の研究者との比較を通じて、本書の位置づけを明らかにする。

著者自身も指摘している通り、セクシュアリティや個人の生活に関する学術的研究は、もはや周縁化のスティグマから脱している。それは、政治的関心の領域においてもセクシュアリティというテーマが周縁からそのほぼ中核近くへと移動されたことを反映している。第二次大戦以降の世界を変革してきた幅広い社会変動について探究することで、われわれは親密性や性愛にかかわる生活の再構成を理解することが出来る。そしてまた、親密性や性愛の再構成を分析することで、曖昧で全容を把握しづらい社会のマクロな変容のプロセ

スに光を投げかけることができる。その意味で、1945年から2005年までのイギリスにおける性愛と親密性の変容についての分析である本書は、非常に社会的な二重の試みを有していると言える。

セクシュアリティ研究における本質主義と構築主義の対立を乗り越えるべく新たな方法論を模索することを目指したウィークスの過去の著作である *Sexuality* (Weeks 1986=1996) は、日本においても上野千鶴子の紹介により、セクシュアリティ研究に大きな影響を与えた。その著作においてウィークスは、M. フーコーの生-権力の概念を、社会学の諸概念を用いて捉え直すことをめざし、アイデンティティについての議論を展開した。しかし本著作では、われわれのセクシュアリティを形成する社会の作用に注目をするというフーコー的な問題関心 (Foucault [1976=1986] など) は保ちつつも、性-権力の概念のような権力とイデオロギーについてのフーコーの強い影響は影を潜めており、むしろ再帰性やリスクといった、最近の社会学理論をセクシュアリティの分野に応用した研究であると言える。特に A. ギデンズの影響は明らかに強く、この著作の中心となっている性愛と親密性の変容に関する悲観主義的理解の乗り越えにおいて、その変容の原動力を説明するために再帰性の概念が積極的に用いられている。ロマンティック・ラブ・イデオロギーや純粋な関係性といった抽象的な概念および理念型そのものについて積極的に議論するギデンズの同テーマの著作 (Giddens 1992) と比較すると、本著は親密性と性愛の変容を表わす多様な社会現象を現実即して丁寧に考察していると言えるが、それ故扱っているテーマが多すぎてやや主張が不明瞭であり、章ごとの主張の関連性もあまり高くない。また、肯定的に性の変容を捉えるという試みを重視するあまり、性犯罪や性の商品化などの現象において発露するような、現代人のセクシュアリティ自体が潜在的に抱えがちな暴力性や非対称性といった負の側面を、本著では意図的に避けているように思える。

本書はひとつのテーマについて深く考察する研究というよりはむしろ、セクシュアリティに関して今すぐ議論すべきテーマを紹介するための著作であると言える。長年セクシュアリティ研究の最前線に立ち続けてきた著者が各章において提起する論点は、そのひとつひとつが極めて重要かつ緊急性を要するものである。ひとりひとりの行動の積み重ねによってもたらされてきた変容を「われわれが勝ち取ってきた世界」と表現するウィークスの立場に立てば、この著作で提示されるテーマについてわれわれひとりひとりが議論をすることこそが、「われわれが勝ち取り得る世界」を実現するための大切なプロセスである。

参考文献

- Foucault, Michel, 1976, *La Volonté de Savoir: Volume 1 de Histoire de la Sexualité*, Paris: Gallimard. (= 1986, 渡辺守章訳『性の歴史I 知への意志』新潮社.)
- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy*, Stanford: Stanford University Press.
- Weeks, Jeffrey, 1986, *Sexuality*, London: Tavistock. (= 1996, 上野千鶴子監訳『セクシュアリティ』河出書房新社.)

(やました やすゆき・修士課程)